

Prajñāpradīpa-ṭīkā 第一章和訳 (2)

西山 亮

はじめに

本稿は、*Prajñāpradīpa-ṭīkā* (以下 PPT) 第一章の和訳とシノブシスであり、拙稿・西山 [2010] の続編である。PPT は 8 世紀前半に活躍した Avalokitavrata が、Bhāviveka (ca.500-570) の *Prajñāpradīpa* (以下 PP) を注釈したものであり、チベット語訳としてのみ現存している¹。本稿で訳出した箇所は、すでに古坂紘一氏によって翻訳研究として発表されている (古坂 [2001])。それにも関わらず再度ここに翻訳を試みるのは、同氏の瑕疵を少しでも修正し、より理解の容易なものを提示したいと願う故である。

訳出に当たっては *sDe dge* 版と *Peking* 版を校合し、PP についても同じ二版の異説を採取した。今回、訳出した PPT のロケーションは以下の通りである。

- *sDe dge*: Tohoku no.3859, Wa 5b2 - 8b3.
- *Peking*: Otani no.5259, Wa 6a7 - 10a4.

なお本稿で訳出した PPT に引用される PP のロケーションは以下の通りである。

- *sDe dge*: Tohoku no.3853, Tsha 45b6 - 46a1.
- *Peking*: Otani no.5253, Tsha 53b7 - 54a1.

本稿において訳出した範囲で注目される点は、まず、「経作者 (Nāgārjuna) が自身の注釈である『無畏』のなかで (mdo mdzad pas rang gi 'grel pa *Ga las 'jigs med du*)」という記述である (see 本稿 3.1.2)。斎藤 [2003] は、『無畏 (*Akutobhayā*)』の成立問題に関する研究史を概観する中で、『中論』の自作作者としての Nāgārjuna に初めて言及した Avalokitavrata が、『無畏』という書名には触れていないと述べているが、この箇所ですら明らかにそのタイトルが挙げられていることが分かる。また

¹ PPT の撰述問題や、その著者 Avalokitavrata の活躍年代については赤羽・早島・西山 [2011, 167-168] の「補足」を参照されたい。

ここで、『無畏』が Nāgārjuna の自注であると Avalokitavratā によって明言されていることは、『無畏』の著者問題を考える上で看過することのできない点である。

もう一点は, Āryadeva (ca. 3, 4 cent.) に帰せられた, 教証 (āgama) と理証 (yukti) に関する詩節についてである (see 本稿 3.3.2). 仏教は各時代, 各地域においてそれぞれの教理を有するが, 仏教内あるいは仏教外の他学派との論争において, その教理を立証することが求められた. 教理の立証のためには, 経典や論典を引用して証明するという「教証」と, 自ら思考し証明するという「理証」とが, 一般に必要とされる. 仏教においては, 仏陀や先行する論師たちのことばを権威として認めつつ, それが独断的で偏狭にならないよう自ら考え, 検討する態度が奨励されているのである. Harivarman (ca. 3-4 cent.) の『成実論』には次のように説かれている。

来啓とは仏の法は当に自身に作証すべく, 但だ他に随うのみならず, 仏の比丘に語るが如し「汝等但だ我が語を信じるのみなること莫れ, 当に自ら, 是の法は行ずべく, 是は行ずべからずと思惟すべし」と².

このような, 仏陀のことばが単にそれだけで絶対的権威として存在するものではなく, それを自ら思考し経験しなければならないということは, Āryadeva に帰せられている *Jñānasārasamuccaya* (JS) 第 31 偈にも説かれている³.

熱し, 切り, こすり合わせて黄金を〔試すのと〕同じように, 比丘たちよ, 賢者は〔私に対する〕尊敬からではなく, 吟味して私の言葉を理解すべきである。

このように, 教証だけでなく理証がなくてはならないという精神は, Avalokitavratā によっても語られ, PPT において彼は, それについて次のような見解を述べている。

「推論」という理証 (rigs pa: *yukti) なしに教証 (lung: *āgama) のみでは, [主張

² T32, 244a23-26: 来啓者。佛法应当自身作証。不但隨他。如佛語比丘。汝等莫但信我語也。當自思惟。是法可行。是不可行。see 上田 [2008, 149.1-150.5].

³ *Jñānasārasamuccaya* k.31 (山口 [1944, 327.4-5]): bsregs bcaḍ bdar ba'i gser bzhin du // dge slong dag gam mkhas rnam kyis // yongs su brtags la nga yi bka' // blang bar bya yi gus phyir min //. このチベット文と *Tattvasaṃgraha-pañjikā* のサンスクリット文とは若干の異同があるが, 翻訳に当たってはサンスクリット文に準拠した。 *Tattvasaṃgraha-pañjikā* (Shastri ed. vol.1:15.23-24, vol.2: 1115.1-2): tāpāc chedāc ca nikaṣāt suvarṇam iva paṇḍitaiḥ / parīkṣya bhikṣavo grāhyam madvaco na tu gauravāt //.

しよう」と望んだ物事は証明されない⁴。(太字は注釈対象であるPPの文言を指している)

つまり、何らかの主張をなそうとする際、教証のみでは根拠や理由にならず、そこに理証が必要であるということを言っているのであり、先に挙げた『成実論』やJSと同じく、理証の必要性を強調していることが分かる。

さて、Avalokitavrataは理証の必要性を強調するために、「師 Āryadevaの御前様が・・・とお説きになったように⁵」と述べ、Āryadevaに帰せられた詩節を二節引用している。まず第一の詩節は、書名が記されていないが *Catuhśataka* のものと同定することができる。文意が不明瞭な詩節ではあるが、教証のみでは主張したいことが証明できない、ということがPPTの文脈におけるこの第一の詩節の趣旨であると思われる。

もし「ある」という語のみによって物事が存在するようになるならば、「ない」という語のみによってどうして〔物事が〕非存在とならないのか⁶。

おそらくここで言う「ある」という語」とは経論のことばのことであり、経論に「ある」と説かれているだけで物事が成り立つのなら当然、その経論に「ない」と説かれているだけで物事は非存在となり成り立たなくなる、という文意であろう⁷。つまりここでAvalokitavrataは、聖典のことばだけでは主張したいことは証明されないということをĀryadevaの口をかりて語っているのである。

そして次にAvalokitavrataは、第二の詩節を引用し、理証の必要性を述べる。

教 (*āgama) と理 (*yukti) によってよく明らかに述べられ、前後に矛盾のない意味

⁴ D Wa 7a3, P Wa 8a5-6: rjes su dpag pa'i rigs pa med par lung tsam gyis ni 'dod pa'i dngos po mi 'grub ste /.

⁵ D Wa 7a3-7a4, P Wa 8a6-8: slob dpon 'Phags pa lha'i zhal snga nas kyis...zhes ji skad gsungs pa lta bu ste /.

⁶ D Wa 7a3-4, P Wa 8a6-7: gal te yod pa'i tshig tsam gyis // dngos po yod par 'gyur (P gyur) na ni // med ces bya ba'i tshig tsam gyis // ci phyir (P ci'i phyir) med par 'gyur ba min //: *Catuhśataka*, D3846 Tsha 17b7, P Tsha 19b6; Lang ed. 148.1-2: yod ces bya ba tsam zhig gis // gal te de nyid dngos yod na // med ces bya ba tsam zhig gis // med par yang ni cis mi 'gyur //; T30, 245a.3-5: 有名詮法有。謂法実非無。無名表法無。法実応非有。

⁷ ただし、経論のことばを軽視しているわけではないことは、「〔教証の〕語のみによって (tshig tsam gyis: *vacanamātreṇa)」という表現が用いられていることから見て取ることができる。聖典のことばだけでは十分ではないが、もちろんその聖典のことばも必要である、ということである。

内容 (*artha) を、最上の者たちは完全に把握する⁸。

この引用文そのものにおいては教証と理証とが等値されており、理証の必要性を述べたものとは言えないが、Avalokītavratā にとってはこの引用文に「理証」が挙げられていることが重要であり、理証の必要性を強調する上で有効なものとして彼はこの引用文を挙げているのであろう。Avalokītavratā は、第一の詩節において教証のみでは主張したいことを証明できないことを確認し、そしてこの第二の詩節で、証明には理証が必要であるということを述べているのである。

さて、この第二の詩節の出典であるが、今のところ同定することができていない。第一の詩節と第二の詩節の間には「de'i phyir: *tasmāt」という接続詞があるのみなので、第二の詩節も第一の詩節と同様 *Catuhśataka* のものと考えられるが、そのテキスト中に当該の詩節を見いだすことはできず、また Āryadeva に帰せられている論典にも同様の内容の文言をトレースすることはできない。ただし、この第二の詩節がいわゆる Āryadeva の著作であろうことは、*Jñānasārasamuccayanibandhana* (JSN) で全く同じ詩節を引用する Bodhibhadra (ca. 10-11 cent.⁹) が、その詩節を Āryadeva のものとしていることから推測することができる。その JSN の一節は次のようなものである。

「焼く」など〔と同じ内容のこと〕を同じ師 (Āryadeva) の御前様は、〔この JS とは〕別のところで (*anyatra), 「教と理によってよく明らかに述べられ、前後に矛盾のない意味内容を、最上の者たちは完全に把握する」と仰ったのである¹⁰。(太字は注釈対象である JS の文言を指している)

このように、当該の詩節の著者を「同じ師 (slob dpon nyid: *ācāryenaiva)」つまり JS を著した Āryadeva とし、そしてその同じ人物が「別のところで (gzhan du: *anyatra)」述べているものとして当該の詩節を引用しているのである。また、冒頭の「焼く」など (bsreg pa la sogs pa)」というのは先に取りあげた試金石の譬喩が述べられる JS 第 31 偈のことであり、JSN でも理証の必要性を確かめるため

⁸ D Wa 7a4, P Wa 8a7-8: don gang lung dang rigs pa yis // legs par mngon par brjod pa dang // snga phyi (P phyir) 'gal ba med pa de // dam pa rnam kyis yongs su gzung //.

⁹ Mimaki [2000, 233.22]. also see footnote 6.

¹⁰ D Tsha 44b4-5, P Tsha 52a5-6: bsreg pa la sogs pa slob dpon nyid kyi zhal snga nas / gzhan du / don gang lung dang rigs pa yis // legs par mngon par brjod pa dang // snga phyi 'gal ba med pa de // dam pa rnam kyis yongs su gzung (P bzung) // zhes bstan pa'o //.

に当該の詩節が引用されていることが注目され、PPT と同じ使われ方をしていることが理解される。

この当該の詩節については、Avalokītavratā と Bodhibhadra が共に Āryadeva のものとしているということと、その両者が理証の必要性を強調するためにその詩節を引用しているということを確認できた。さらにもう一つこの詩節について付け加えるならば、*Vyākhyāyukti* の次の一節が関係しているということである。

意味内容に対して非難 (*codya) されるべきことにも 2 つある。(1) 前後に矛盾すると非難されるべきことと、(2) 論理 (rigs pa) に矛盾すると非難されるべきことである¹¹。

つまり、前後で言っていることが矛盾していたり、主張が論理的でない場合、その主張の意味内容 (don: *artha) に対して非難がなされるべきである、という趣旨の文言であり、この文言と、教証と理証によってよく述べられ前後に矛盾のない意味内容を是としている当該の詩節とが、内容的に軌を一にしていると言うことができる。

第二の未同定の詩節について整理すると、まず、Avalokītavratā と Bodhibhadra が、ともに Āryadeva の説としていることから、それは少なくとも Āryadeva の著作であり¹²、さらには、Avalokītavratā の引用の仕方によると、*Catuhśataka* のものである可能性が強いと言うことができる。そして、当該の詩節と *Vyākhyāyukti* との内容的な一致を見てとることができた。以上、本稿で訳出した範囲で留意すべき点を、解説を交えながら指摘した。

¹¹ D Shi 86a5, P Si 101a5, Lee[2001, 169.17-19]: don la brgal ba yang rnam pa gnyis te / snga phyi 'gal bar brgal ba dang / rigs pa dang 'gal bar brgal ba'o //.

¹² Āryadeva については少なくとも二人存在するとされており、第一の Āryadeva は中観派の学匠として 3, 4 世紀、第二の Āryadeva はタントラの軌範師として 8 世紀初頭ににその年代が位置づけられている (Mimaki[1987, 431a22-34])。当該の詩節を引用する Avalokītavratā が 700 年頃活躍したと推定されていることを踏まえると、その詩節が第二の Āryadeva のものであるとは考えにくく、第一の Āryadeva とする方が妥当であると思われる。

Prajñāpradīpa-ṭīkā 第一章和訳

3 Bhāviveka が Prajñāpradīpa を著した理由

3.1 Prajñāpradīpa 述作の経緯 (D5b2-7, P6a7-b6)

3.1.1 注釈者の特質

そのように¹³, 「不可思議で無上なる果報をともなった法の真実 (chos kyi de kho na) を説く」という自利利他¹⁴の功德を述べることによって世尊を賞賛する者, そしてまた, [中観派の] 論典が特別な果報¹⁵と目的¹⁶をもつということを¹⁷, 他の者が追求する [『中論』への] 非難を取り除くことを通じて説く¹⁸者, 彼は注釈者である賢者 (Bhāviveka) その人である.

P6b

¹³ 「de ltar」の指示内容は, Bhāviveka の帰敬偈である; PP D Tsha 45b5-6, P Tsha 53b6-7, 西山 [2010, 57.9-58.4]: gang gis chos kyi de nyid rnam rtog legs bral ba // spros pa kun zhi blo ngan rab rib skyon (PP kun) 'joms can // tshig gi yul ma yin yang de nyid (PPT yi) sgro btags nas // sa kun 'byor phyir bstan pa de la phyag 'tshal lo // (法の真実, 分別をよく離れ, 一切の戲論が鎮まっており, 悪い知のティミラ眼病という欠陥を打破する (性質を) もち, ことばの対象ではないが, まさにその (法の真実) を仮設して, すべての世界の繁栄のために説きになったその方に礼拝します).

¹⁴ 「法の真実を説く」というのは「利他」の側面であり, 「自利」ではないと思われる. なぜ「自利」が併記されているのか, 不可解である.

¹⁵ cf. PPT D Wa 1b4-5, P Wa 2a4-6, 西山 [2010, 56.7-9]: gang gi phyir 'jig rten ni las sam bstan bcas 'bras bu dang bcas pa la 'jug gi 'bras bu med pa la mi 'jug pa de'i phyir dbu ma'i bstan bcas la chos thams cad kyi de kho na nyid rtogs pa ni kun rdzob tu 'bras bur rnam par gzhas go // (世間の人々は, 果報をともなう行為か論典には着手するが, 果報がないものには手をつけないので, 中観派の論典においては, 一切法の真実を証得することが世俗的な果報として確立しているのである).

¹⁶ cf. PPT D Wa 5b1-2, P Wa 6a7, 西山 [2010, 65.12-13]: ci'i phyir bstan ce na / sa kun gyi 'byor ba'i (D 'byor ba'i: P 'byor ba kun) phyir bstan to zhes rnam par bshad pa yin no // (何のために説いたのかといえ, 「すべての世界の繁栄のために説いた」と説明されたのである).

¹⁷ dgos pa dang bcas pa dang /. ここに dang が確認され, チベット文として読みにくい, サンスクリットの ca のような (i.e. A ca B ca) 用法と考えて翻訳した. cf. 古坂 [2001, 11.17-20]: そのように, 世尊に対し, 自他の利益, すなわち不可思議で無上の果実をもつ法の真実を説くことの功德を述べて賞賛すること, 論典の果実に特長があり, 意義 (需要) がある (ようにすること) と, 他が追求した過失を除去する視点から説くこと, それが注釈者の善くするところである.

¹⁸ D'ston par byed pa: P bstod par byed pa.

3.1.2 対論者からのジレンマの提示

他の者たちは通常、師 Bhāviveka による説明の考慮 (*saṃkalpa) に耐えられずに、「経作者 (Nāgārjuna) が自身の注釈である『無畏』のなかで¹⁹説いた、＜智慧の完成の教理＞ (*prajñāpāramitānīti)²⁰ の相 (*lakṣaṇa) と全く同じ相を、もしこの者 (Bhāviveka) が説くならば、〔その相の〕説明を始めること、これは不要である。その〔相〕は最初からすでに〔経作者によって〕説明されているので、すでに織られている〔織物〕を織るのと同じことである」、あるいはまた、「そこ（『無畏』）で説明されなかったものがここ (*Prajñāpradīpa*) で提示される場合も、経（『中論』）を逸脱することを自身の考えによって説明するのは、先と同様、理に合わない」と〔二様に〕抗弁する。それ故に注釈者〔である師 Bhāviveka〕はまず最初に、内部²²から排除されるべきその二つの前主張 (*pūrvapakṣa) を取り除くために、

¹⁹ 『無畏』と Nāgārjuna については本稿の「はじめに」において言及した。

²⁰ shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul. Pras においても同様の表現がみられ、その著者 Candrakīrti が＜智慧の完成の教理＞に通曉した者として Nāgārjuna を理解していることが分かる: Pras (chap. 1), 3.1: ācāryāryanāgārjunasya viditāvīparītaprajñāpāramitānīteḥ (D 'A 2a3, P 'A 2b2-3: shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul phyin ci ma log pa thugs su chud par gyur pa'i slob dpon klu sgrub kyis). cf. 丹治 [1988, 2.8-9]: 「般若波羅蜜の誤りない説明方法に通曉している尊いナーガールジュナ師が」。

²¹ 『無畏』において＜智慧の完成の教理＞ (shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul) という語は、チベット語訳の奥付にのみ確認される (D Tsa 99a4, P Tsa 114a3)。したがって、『無畏』全体で＜智慧の完成の教理＞が説き示されている」と Avalokitavratā が考えていたと理解すべきであろう。

²² 以下に示される PP の「同門の者たち (tshangs pa mtshungs par spyod pa rnam)」という表現がこの「内部」に対応している。さらに、後述されるように (D Wa 7a1-2, P Wa 8a3-4), Avalokitavratā がこの「同門の者たち」を「最勝の乗りもので行く人々 (theg pa mchog gi 'gro ba rnam)」と言い換えていることから、「内部」とは「大乘の者」であることが分かる。

3.1.3 答論

推論 (*anumāna) と論破 (*dūṣaṇa) の明晰さと正しさ²³ が示されており、悪見の網を鎮める (性質を) もつ²⁴ <智慧の完成の教理> を、師である御前さま (Nāgārjuna) は偈頌のみによってお説きになられた。しかし、同門のある者たちは (師 Nāgārjuna がお示しになったことを) 理解していない。したがって、彼らが理解するようにと願って、聖典 (*āgama) にしたい『中論』を説明しよう²⁵

²³ cf. D Wa 6a1-7, P Wa 6b8-7a8: Avalokītavratā は「推論と論破の明晰さと正しさ」の、修飾・被修飾の関係を二通り挙げている；(1)「推論の明晰さと正しさ」と「論破の明晰さと正しさ」；(2)「推論の明晰さ」と「論破の正しさ」。さらに (2) を「中観派と対論者」という観点から二様に区分して説明しており、つまりは計三通りの解釈が示されていることになる。

²⁴ cf. D Wa 6b3. P Wa 7b4-5: zhi bar byed pa dang ldan pa zhes bya ba ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul gang la lta ba ngan pa'i dra ba zhi bar byed pa'i ngang tshul yod pa de ni lta ba ngan pa'i dra ba zhi bar byed pa dang ldan pa yin no // (「鎮める (性質を) もつ」についていえば、悪見の網を鎮める性質をもつ智慧の完成の教理> が、悪見の網を鎮める (性質を) もつものである)。

²⁵ 漢訳 (T30, 51b26-51c1.) : 「我師聖者。如自所証。於深般若波羅蜜中。審驗真理。開顯實義。為斷諸惡邪慧網故。彼惡見者。雖修梵行。以迷惑故。皆成不善。今欲令彼悟解正道。依淨阿含。作此中論。宣通佛語。」

この PP の文言に対してなされた諸研究者の翻訳は以下の通りである (どの括弧もすべて原著のまま)。特に、拙訳の「推論と論破の明晰さと正しさが示されており、悪見の網を鎮める (性質を) もつ <智慧の完成の教理> を」に対応する部分を比較されたい。筆者は「<智慧の完成の教理> に「推論」云々と「悪見」云々という二つの属性が具わっている」と読み、理解したが、先行訳の中には別の解釈を採っているものがある。PP のみを見れば、少々読みにくく、様々な解釈しうる可能性があるが、PPT に従うと、拙訳のようになると考えられる (PPT D Wa 6a7-b1, P Wa 7a8-b1, see 本稿 3.2.3 冒頭)。

- Kajiyama [1963, 40.3-10]: Der verehrte Meister (Nāgārjuna) hat die Prinzipien der Vollkommenheit der Einsicht, welche die Darlegung der Schlußfolgerungen und der Widerlegungen (der anderen), die Mitteilung der Wahrheit und das Zurruhebringen des Netzes der falschen Ansichten umfaßt, in Merkversen verkündet. Doch haben sie einige von den Schülern (*brahmacāriṇaḥ*) nicht verstanden. Ich will daher, damit sie auch von diesen verstanden werden, die mittlere Lehre der Überlieferung entsprechend darlegen.
- 江島 [1982, 154.15-155.2]: 師〔ナーガールジュナ〕は、頌だけでもって推論と論破との明晰にして真なるものを説き、また悪しき見解の網を寂滅せしめる般若波羅蜜の理を説く。しかし修行者の中のある者は〔それを〕理解しない。だから彼らが理解するようにと思つて、〔私は〕聖典にしたがつて「中論」を注解するのである。
- 能仁 [1992, 47.5-10]: アーチャーラヤ〔ナーガールジュナ〕は、偈頌だけによって、推論 (anumāna) と論破 (dūṣaṇa) の明らかにして正しさを示すこと、及び誤った見解の網を寂滅せしめることと相応した般若波羅蜜の道理 (prajñāpāramitānīti) をお説きになられた。しかし、梵行者 (brahmacārin) たちのある者は理解しない。それ故に、私は彼らが理解せんことを願つて聖教 (āgama) にしたがつて、「中論」(Madhyamakaśāstra) を注釈しよう。

slob dpon gyi zhal snga nas kyis (PP-D kyī, PP-P om. kyis) tshig le'ur byas pa dag kho nas (PPT-D na) rjes su dpag pa dang sun dbyung ba'i gsal ba dang de kho na dag bstan pa dang / lta ba ngan pa'i dra ba zhi bar byed pa dang ldan pa shes rab kyī pha rol tu phyin pa'i tshul bka' stsal mod kyī / tshangs pa mtshungs par (PPT-P tshungs par) spyod pa rnams las kha cig gis mi rtogs pas (PPT-P om. pas) de'i phyr de dag gis (PPT-P gi) rtogs par bya bar 'dod nas lung ji lta ba bzhin du dBu ma'i bstan bcos bshad par bya'o²⁶

と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

3.2 Nāgārjuna の説示に関する解説 (D5b7-7a1, P6b6-8a3)

3.2.1 「tshig le'ur byas pa (偈頌)」の語義

そのうち、「師である御前さまは」という〔表現〕は、〔師 Bhāviveka が〕慢心を捨て去っていることを示している。「偈頌 (tshig le'ur byas pa)」についていえば、D6a それら〔推論と論破〕を分節化したもの (tshig le'u) でもあり、〔再〕構成したもの (byas pa) でもある。〔偈頌とは、〕主張を効果的にするものであり、〔主張を〕現前させるもの (*abhinirvartaka) であり、〔主張を〕成就させるもの (*prasādhaka) である²⁷。「のみによって」とは「その〔主張〕をそれら偈頌のみによって」である。したがって「この『中論』」においては、〔師 Nāgārjuna〕ご自身の付加的説明

- Ames [1993, 213.18-26]: The ācārya [Nāgārjuna] has taught [both] the correct verbal expression and the reality of inference (*anumāna*) and refutation (*dūṣaṇa*) just by means of [his *Mūlamadhyamaka-kārikā* [MMK]]. He has stated the doctrine (*naya*) of the perfection of discernment (*prajñā-pāramitā*), which puts an end to the net of bad views. Nevertheless, some of [our] fellow Buddhists have not understood [the MMK]. Therefore, wishing to make them understand, [I] will explain the *Madhyamakāśāstra* [i.e., the MMK] according to scripture (*āgama*).
- 古坂 [2001, 12.7-12]: アーチャールヤ (ナーガールジュナ) の御前がカーリカーのみで推論と批判の明晰かつ真実なるものを示し、悪見の網を静めさせる (性質) をもつ般若波羅蜜の道理 (理趣) をお説きになったのは勿論であるが、梵行を等しく行ずる人たちのうちで或る人達が理解しないので、それ故に彼等が理解するようにと欲してアーガマに従って中 (観) の論典を説こう、

²⁶ PP, D Tsha 45b6-46a1, P Tsha 53b7-54a1.

²⁷ cf. 古坂 [2001, 117.10b-6b]: 「カーリカー」というのは、それらは語 (によって) 分節されているものでもあり、造ったものでもあって、主張の有効性をもたらすもの (利益事: *artha-kriyā*) であり、現前に実現させるもの (現前作成就: *abhinirvartaka*) であり、また成就させるものである。

(skyes bu'i rtsal) なしに」[という意味]である。

3.2.2 「推論と論破の明晰さと正しさ」の解釈

「推論と論破の明晰さと正しさが示されており」についていえば、(1) <智慧の完成の教理>の中で (gang du)²⁸, 自身の主張を証明するために推論の明晰さと正しさが示されており、対論者の主張を破るために論破の明晰さと正しさが示されているのである。[つまり]それが「推論と論破の明晰さと正しさが示されており」ということである。そのなかで、「推論の明晰さ」とは「[推論の]音素 (*varṇa) と単語 (*pada) と文章 (*vākya)²⁹が極めて明瞭である」ということである。「正しさ」とは「擬似推論 (*anumānābhāsa) ではない」ということである。あるいはまた、「明晰さ」とはことばを本質 (*ātman) とするものである。「正しさ」とは意味 (*artha) を本質とするものである³⁰。同様に、「論破の明晰さ」とは「[論破の]音素と単語と文章が極めて明瞭である」ということである。「正しさ」とは「擬似論破 (*dūṣaṇābhāsa) ではない」ということである。あるいはまた、「明晰さ」とはことばを本質とするものである。「正しさ」とは意味を本質とするものである。「示されており」とは「明らかにされており」ということである。(2a) あるいはまた、<智慧の完成の教理>の中で (gang du)³¹, 中観派の用いる推論を明晰に述べることによって、対論者の主張を論破することの正しさが示された。[つまり]それが「推論と論破の明晰さと正しさが示されており」ということである。(2b) あるいはまた、<智慧の完成の教理>の中で (gang du)³², 対論者の用いる推論が〔言語的に〕明晰であるとしても、中観派によって論破することの〔意味的な〕正しさが説かれた³³。[つまり]それが、「推論と論破の明晰さと正しさが示されており」ということである。

P7a

²⁸ see the following footnote.

²⁹ yi ge dang tshig dang ngag: cf. *Pramāṇavārttika-svavṛtti*: 160.19: cittasamutthānā hi vāgvijñāptir varṇapadavākyaḥhidhānā /: D4216 Ce 355b5, P Ce 522a2: sems kyis kun nas bslang ba can gyi ngag gi rnam par (P pa) rig byed yi ge dang tshig dang ngag ces bya ba /; 若原 [1988, 13.11-12, 注 30-32].

³⁰ cf. AKBh Chap. 2.47ab and autocommentary; 櫻部 [1969, 346.5-350.9].

³¹ see the following footnote.

³² see the following footnote.

³³ 直前 (D Wa 6a3-4, P 7a3-4) の「明晰さ」とはことばを本質とするものである。「正しさ」とは意味を本質とするものである」という文言を参考にして、意味を補いこの一文を理解した。

3.2.3 「悪見の網」の解説

その<智慧の完成の教理>の中で³⁴ 推論と論破の明晰さと正しさが示されたの
P7b みならず、その<智慧の完成の教理>は「悪見の網を鎮める（性質を）もつもの」
D6b でもある。そのなかで「見 (lta ba)」とは、「見解 (mthong ba)」と意味は異ならず、
同義である。「悪見」とは「悪い見解」であり、「自と他、有と無などとして見る」
という「見」である。「悪見の網」についていえば、「悪見」それ自身が「網」であ
る³⁵。たとえば、網によって覆われて自由に身動きがとれなくなるのと同様に、悪
見の網によって覆われるならば、涅槃におもむくことはできない。それ故に、悪
見それ自身が網と同じようなものであるから、「悪見の網」〔と表現される〕ので
ある。「鎮める（性質を）もつ」についていえば、悪見の網を鎮める性質をもつ
智慧の完成の教理>が、悪見の網を鎮める（性質を）もつものである。

3.2.4 「智慧の完成の教理」の解説

またその〔推論と論破の明晰さと正しさが示されており、悪見の網を鎮める
性質をもつもの〕とは何かというならば、そのために<智慧の完成の教理>と
〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。そのうち、「智慧」とは分析 (*pravicaya) を
特徴とするものである。諸存在を分析して定めるものが「智慧」である³⁶。「完
成 (*pāramitā)」とは不可得 (*anupalabdhi) を特徴とするものである³⁷。〔完成
(*pāramitā) の内の〕彼岸 (*pāra) とは不可得であり、智慧 (*prajñā) が不可得
なその〔彼岸〕におもむいた (*ita), 〔すなわち〕至った、その〔彼岸に至りつい
た智慧〕が「智慧の完成 (*prajñāpāramitā)」と言われており、〔至り終わってい

³⁴ 原文は「shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul der」であり、この「de(r)」は、「推論
と論破の明晰さと正しさ」という句に対する三通りの解釈すべての中に見られる、「shes rab
kyi pha rol tu phyin pa'i tshul gang du」の「gang du」を受けている。

³⁵ 「悪見」と「網」を同格で読むべきことを示しており、これは今日一般に Karmadhāraya と呼
ばれている合成語解釈の一種である。

³⁶ cf. AKBh 2.4: prajñā dharmapracicayaḥ /. ただし「定めるもの (rnam par 'jog par byed
pa, *vyavasthāpaka)」という定義に関しては、他の典籍にトレースできず、Avalokītavratā
によるオリジナルの定義である可能性を指摘できる。また、「智慧」に関してのこの言及は、
Madhyamakahrdaya-kārikā III.7-11 において Bhāviveka が「勝義的な智慧 (pāramārthikī
prajñā)」と「慣習的な智慧 (sāmṣketikī prajñā)」の二つに「智慧」を分類していることを想
起させる (see 安間 [2008, 51.6b-1b])。

³⁷ pha rol tu phyin pa zhes bya ba ni mi dmigs pa'i mtshan nyid do //. cf. PPT D Wa
16a2-3, P Wa 19a7-8: don dam pa'i bden pa ni thams cad dmigs su med pa'i mtshan
nyid de /.

るので、もはや〕至ることは無いのである³⁸。「教理」とは、「智慧の完成」の「教理」であり³⁹、それは智慧の完成を特徴とする教え (*dharma) が説示されているものである。あるいはまた、「智慧の完成」それ自体が「教理」であり⁴⁰、それは一切法が不可得であるということに導き、あるいはそれは他者 (gzhan gyi rgyud) に利益をもたらすものである。あるいはまた、それは無量の福德と知の資糧を積んだ世間の人々を、輪廻という牢獄から救い出し、一切の願望 (*āśaya) を満たす如意宝珠のように導く、それが「教理」である。「お説きになられた。しかし」とは「推論と論破の明晰さと正しさが示されており、悪見の網を鎮める〔性質を〕もつその<智慧の完成の教理>を、そのように〔偈頌のみによって〕説き示したけれども」である。

P8a

D7a

3.3 Bhāviveka の著述理由の解説 (D7a1-8b3, P8a3-10a4)

3.3.1 Prajñāpradīpa の対象者

「同門の者たち」についていえば、梵行と見解を共有している者たちが「同門の者たち」である。つまり、最勝の乗りもので行く人々のことである。「その〔同門の者〕たちの中のある者は」とは「詳しく説明すると理解する者たちは (*vipaṇcitajña)」であり、「冒頭を述べる〔だけ〕で理解する者たちは (*udghaṭitajña)」ではない⁴¹。「理解していない。したがって」とは、「推論と論破を教えられなければ自身で⁴²〔それを〕用いること (*upasaṃhāra) のできない者たちが〔理解していない。した

³⁸ pha rol zhes bya ba ni mi dmigs pa ste shes rab gang mi dmigs pa der phyin cing son pa de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa zhes bya ste / phyin pa med pa yin no // 「智慧の完成 (prajñāpāramitā)」の語義解釈であり、やや文意が取りにくい。『pāramitā』を「彼岸に (pāram) 至る (itā)」とする伝統的な解釈をとりつつ、Avalokitavratā がその「彼岸」に「不可得」という空思想の特徴を付与していることが見てとれる。cf. 渡辺 [1996, 1997, 1998]。

³⁹ この説明は、Genitive Tatpuruṣa と一般に呼ばれている合成語解釈の一種である。

⁴⁰ この説明は、Karmadhāraya と一般に呼ばれている合成語解釈の一種である。

⁴¹ cf. PPT D Wa 25b3-4, P Wa 30b2-3: 'di la gang zag bzhi yod de / mgo smos pas go ba dang / rnam par spros nas go ba dang / bkri dgos pa dang / tshig lhur len pa'o // de la mgo smos pas go ba ni mgo smos shing glengs pa tsam gyis don go ba gang yin pa'o // rnam par spros nas* go ba ni rnam par spros shing rgyas par bshad na don go ba gang yin pa'o // (これ (skye bo) には四つのブドガラがあり、〔それは〕冒頭を述べる〔だけ〕で理解する者 (*udghaṭitajña) と、詳しく説明すると理解する者 (*vipaṇcitajña) と、導く必要のある者 (bkri dgos pa) と、字面を追う者 (tshig lhur len pa) とである。そのうち、冒頭を述べる〔だけ〕で理解する者とは、冒頭を言って伝えるだけで、意味を理解する者である。詳しく説明すると理解する者とは、広げて詳説すると意味を理解する者である)。cf. 加納・中村 [2009, 注 51]。

⁴² D rang gis: P rang gi.

がって)」である。

3.3.2 傍論：教 (āgama) と理 (yukti)

「したがって、彼らが理解するようにと願って」についていえば、(1)⁴³「推論」という理 (*yukti) なしに教 (*āgama) のみでは、〔主張しようと〕望んだ物事は証明されない。師 Āryadeva の御前さまが⁴⁴、「もし「ある」という語のみによって物事が存在するようになるならば、「ない」という語のみによってどうして〔物事が〕非存在とならないのか」、そのために「教と理によってよく明らかに述べられ、前後に矛盾のない意味内容 (*artha) を、最上の者たちは完全に把握する」とお説きになったように、〔つまり、〕「〔教だけでなく理も示されねばならないから、〕したがって、〔理である〕推論と論破を用いることのできない、詳しく説明すると理解する彼らが、理解するようにと願って」〔という趣旨〕である。

3.3.3 傍論：Nāgārjuna の伝記

- P8b (2)⁴⁵あるいはまた、「したがって、彼らが理解するようにと願って」についていえば、これに関して世尊は『聖大雲經』⁴⁶の中で、「Licchavi 族の童子である Sarvaloka-priyadarśana に授記して、「私が般涅槃してから、この者は、Śālivāhana 王の〔治世の〕とき、Nāga という名の比丘となって、私の教説を明らかにし、順次に、Prasannaprabhā という名の世間界で、Jñānākara-prabha という名の如来となるだろう」と授記され、また同様に、『聖入楞伽經』⁴⁷にも、「善逝が涅槃した後、諸々の教義を把握する者が、時を経て現れるということ、マハーマティ、あなたは知らなさい⁴⁸。南方 Bheta (Skt. Vedālī) 国に極妙 (śrīmat) で名高い比丘がおり、彼は Nāga という名で呼ばれ、有と無との〔両〕極端を斥ける⁴⁹。世間において、自身の乗り物 (yāna) を無上なる大乘として明らかにし、歡喜地を成就し
- D7b

⁴³ 「de'i phyir de dag gis rtogs par bya bar 'dod nas」の第一解釈が「どのような者が理解していないのか」という観点から提示される。

⁴⁴ 以下の、Āryadeva に帰せられた教証と理証に関する詩節については、本稿の「はじめに」に詳述したので、それを参照されたい。

⁴⁵ 「de'i phyir de dag gis rtogs par bya bar 'dod nas」の第二解釈が「何を理解していないのか」という観点から提示される。

⁴⁶ see Geshe Ngawang Samten and Garfield [2006, 11.12–15]. cf. Suzuki [1999].

⁴⁷ *Laṅkāvatāra-sūtra*, 286. see 船山 [2003, 133.22–26].

⁴⁸ nirvṛte sugate paścātkālo 'tīto bhaviṣyati / mahāmate nibodha tvaṃ yo netrīm dhārayiṣyati // 164

⁴⁹ dakṣiṇāpathavedālyāṃ bhikṣuḥ śrīmān mahāyaśaḥ / nāgāhvayaḥ sa nāmnā tu sadasatpakṣadārakaḥ // 165

て、彼は極楽へ行くだろう⁵⁰」とお説きになられている。したがって、その〔師 Nāgārjuna〕が、この最勝の乗りものを有と無という〔両〕極端を排斥することをもって説明して〔も〕、ある者たちが信解 (*adhimukti) せず理解しないので、了義を未了義として説き、未了義を了義として説くのである⁵¹。「したがって、その理解しない彼らが理解するようにと願って」〔という趣旨〕である。

3.3.4 傍論：了義と未了義

了義と未了義を特徴とする〔経〕は、『聖無尽意所説経』で⁵²、「そのうち、了義経とは何か、未了義経とは何かというならば、我 (*ātman)、有 (*sattva)、靈魂 (*jīva)、養育者 (*poṣa)、原人 (*puruṣa)、ブドガラ (*pudgala)、人 (*manuṣa)、人間 (*mānava)、作者、受者、知る者、観察者、語を様々に発する者、〔つまり〕主体 (bdag po) が存在しないものに対して「主体を持っている」と説く諸経典が、未了義のものである。〔一方、〕空性、無相、無願、無作 (*anabhisamskāra)、不生、非存在、無物、無我、無有、無靈魂、養育者の非在、原人の非在、ブドガラの非在、〔つまり〕主体の非在と解脱門にいたるまでのものを説く諸経典が、了義のものである」とお説きになられた。『聖月灯経』でも「空は世尊が示したままのものであり、〔それが〕了義経の区分であると知るべきである。有、ブドガラ、原人を説くすべての教説 (dharma) は未了義のものであると知るべきである⁵³」とお説きになられたのである。

P9a

「したがって、その理解しない彼らが理解するように」とは「彼らが証得するように」という意味である。「彼らが理解するようにと願って」とは「彼らが証得

D8a

⁵⁰ prakāśya loke madyānam mahāyānam anuttaram / āśādy bhūmiṃ muditāṃ yāsyate 'sau sukhāvatīm // 166

⁵¹ やや理解しにくい文章であり、了義「経」や未了義「経」というように「経」を補って解釈すると意味がとれないが、ここにその「経」ということばがないことから推測すると、教 (āgama) の文言を理 (yukti) によって解釈をほどこし、相手の能力に合わせて教説を提示するということがここで示されていると考えられる。つまり、相手に合わせて了義 (e.g. 無我) を未了義 (e.g. 我) に、未了義を了義に解釈しようということであろう。したがって、古坂 [2001, 16.1-2] のように「了義の経は不了義として説くが、不了義は了義として説くのである」と「経」を補ってこの一文を理解する必要はないと思われる。

⁵² Akṣayamatīnirdeśasūtra, vol. I, p.117.9-10, p.1173b-p.118.6. 了義経に関する記述のなかでは「知る者」「観察者」、未了義経に関する記述のなかでは「養育者の非在」「原人の非在」が Akṣayamatīnirdeśasūtra において欠けている。翻訳等に関しては *ibid.* [vol. II, 449.10-11; 451.12-1b] を参照した。

⁵³ cf. Pras 44.2-5, 276.5-8: nītārthasūtrāntaviśeṣa jānati yathopadiṣṭā sugatena śūnyatā / yasmin punaḥ pudgala satva pūruṣo neyārthato jānati sarvadharmān //. ただし、Pras 中では Samādhirāja-sūtra の一節として引用され、実際にその經典中にこの詩節が確認される (Vaidya ed. 44, chap. 7, v. 5).

するようにと願って」である。「聖典にしたがって」とは「自身の知によってではなく」である。そのように〔聖典にしたがう〕ならば、この〔師 Bhāviveka によって〕構成されたもの (*Prajñāpradīpa*) は⁵⁴くり返しになったり、無意味になったりしない。というのも、推論と論破に巧みでない有情たちの思考は、よく弁別された〔聖典〕に対して働くからである。あるいはまた、「聖典にしたがって」とは、了義は〔了義の〕まま、未了義は〔未了義の〕まま如実に説明するということであり、したがって了義と未了義を顛倒することは良いことではなく⁵⁵、その〔顛倒〕を避けるためにも〔師 Bhāviveka が『中論』を〕詳しく解説することに欠陥はない。

3.3.5 「中」の語義

P9b 「中の (dbu ma'i)」のうち「中 (dbu ma)」とは⁵⁶、心髄 (*hṛdaya) であり、〔つまり〕ことばより成る (tshig las 'byung ba) ものすべてのなかで、この中の道 (dbu ma'i lam) は最上のものであり、心髄である。他の典籍 (*pravacana) は断滅・常住という極端を説くために心髄ではないが、「中」は断滅・常住という極端を排斥する。それ故に心髄であるので「中」である。あるいはまた、「中」についていえば、＜智慧の完成の教理＞である、「不生」などの事柄を集めた、虚空のような論典のうちから〔さらに選別し、〕集めたものなので「中」である。あるいはまた、「中」⁵⁷についていえば、〔師 Nāgārjuna は〕存在と非存在の〔両〕極端を離れたことによって、この〔世界〕に中道を示した。両極端を離れる方法をこの『〔中〕論』はすべて解説するけれども、両極端を離れることに戸惑いを隠せない者たちのために一部だけを述べるべきである。〔ただし、〕勝義としてはすべての存在は不生であるから、存在という極端を捉えることもなく、非存在という極端を捉えるこ

⁵⁴ cf. PPT D Wa 8b3, P Wa 10a3: 'grel pa byed pa'i rnam par bshad pa brtsams pa / (注釈者 (=Bhāviveka) が説明を構成することは)、この記述によって「構成されたもの (brtsams pa)」が PP を指していることが分かる。

⁵⁵ すでに述べられた「了義を未了義として説き、未了義を了義として説くのである」という一文と矛盾しているように見えるが、先述の箇所は理証 (yukti) の必要性を説く文脈で述べられたものであり、「理によって了義を未了義に、未了義を了義にしよう」ということを示していたのであって、一方この箇所は教証 (āgama) を強調する文脈で述べられていることを勘案すると、前後に矛盾はない。つまりここでは、「了義を了義として、未了義を未了義として説く」ということが「聖典にしたがう」ことを意味すると説明されているのである。

⁵⁶ 「dbu ma'i bstan bcos」が「madhyamakāśāstra」であるとすれば、「dbu ma'i」から「dbu ma」を取り出して注釈するというこの記述は不可解である。あるいは「dbu ma'i」と「dbu ma」それぞれに「madhyamakasya」と「madhyamaka」が対応する可能性もある。なお、「madhyamaka」の解釈を巡っては斎藤 [2000] が詳しい。

⁵⁷ D dbu ma pa: P dbu ma. 別解釈の提示を表す「あるいはまた (yang na)」が用いられているので、ここでのトピックとなっている「dbu ma」を指示する P の読みを採った。

ともない。つまり、帰滅無 (*pradhvaṃsābhāva) のように、「存在」が滅したことによって、「非存在」と呼ばれる。たとえば、「長」と相対的に「短」を、「彼岸」と相対的に「此岸」と名付けられるようなものである。〔しかし〕勝義として存在は不生であるから、何が滅して非存在となり、何と相対的に名付けがなされるのか。師 [Nāgārjuna] が「もし「存在」が成り立たないならば、「非存在」は成立することとならない。「存在」が別様に変化することを「非存在」と人は言うのである⁵⁸」とお説きになったように。

3.3.6 「論」の語義

「論」とは、煩惱という敵を抑えるから、また〔人々を〕悪趣への恐れから守るが故に「論」といわれるのである。あるいはまた、「論」とは分別という敵を抑えるから、また不可思議で希有な三身を得させるから「論」である。あるいはまた、「論」とは寂靜なる法を示すから、また増上戒学・増上定学・増上慧学の三学を示すから、そして釈迦牟尼如来によって説かれた三解脱を示すから「論」なのである。

「説明しよう」とは、したがって、それら〔説明する〕理由があるから、注釈者が説明を構成することは無果ではないので、聖典にしたがって『中論』を説明しよう、という意味である。

D8b

P10a

(以上)

最後に、テキストの読解に際しご助言をいただきました。
龍谷大学教授・桂紹隆先生と大兄・安間剛志氏に、記して感謝申し上げます。
本稿のどこかに勝れた点があれば、それはご両人のお力添えの賜物に他ならず、
反対に、至らぬ点があるとすれば、その責任は偏に筆者にある。

⁵⁸ MMK15-5: bhāvasya ced aprasiddhir abhāvo naiva sidhyati / bhāvasya hy anyathābhāvam abhāvaṃ bruvate janāḥ //

シノプシス

3 Bhāviveka が *Prajñāpradīpa* を著した理由

3.1 *Prajñāpradīpa* 述作の経緯 (pratīka の導入, D5b2-7, P6a7-b6)

- 3.1.1 注釈者の特質 世尊を賞賛し、中観派の論典が特別であることを説く者こそが、注釈者 Bhāviveka である。
- 3.1.2 対論者からのジレンマの提示 Bhāviveka が『中論』を注釈するならば、その注釈は『中論』と同一か別異かのいずれかであり、どちらにしても不合理となる。
- 3.1.3 答論 (Bhāviveka の見解, pratīka) ある者たちが Nāgārjuna の示したことを理解していないが故に、『中論』に注釈を加えるのである。

3.2 Nāgārjuna の説示に関する解説 (pratīka 前半の注釈, D5b7-7a1, P6b6-8a3)

- 3.2.1 「tshig le'ur byas pa (偈頌)」の語義 分節化し、再構成したものである。
- 3.2.2 「推論と論破の明晰さと正しさ」の解釈 「明晰さ」とはことばを本質とし、「正しさ」とは意味を本質とする。
- 3.2.3 「悪見の網」の解説 悪見の網に覆われていては、涅槃におもむくことはできない。
- 3.2.4 「智慧の完成の教理」の解説 智慧の完成を特徴とする教えが示され、「不可得」に導き他者に利益をもたらすものが、＜智慧の完成の教理＞である。

3.3 Bhāviveka の著述理由の解説 (pratīka 後半の注釈, D7a1-8b3, P8a3-10a4)

- 3.3.1 *Prajñāpradīpa* の対象者 詳説すると理解する者たちのために、この *Prajñāpradīpa* は説かれている。
- 3.3.2 傍論 教 (āgama) と理 (yukti) : 教だけでなく、理も示されねばならない。
- 3.3.3 傍論 Nāgārjuna の伝記 (『聖大雲經』と『入楞伽經』より)
- 3.3.4 傍論 了義と未了義
- 3.3.5 「中」の語義 「中」とは心髄であり、選ばれたものであり、また中道である。
- 3.3.6 「論」の語義 「煩惱」や「分別」という敵を抑え、三学や三解脱を示すから「論」である。

テキスト

- AKBh Vasubandhu. *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradhan, Prahlad. ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series 8. Patna, Jayaswal Research Institute 1967.
- Akṣayamatinirdeśasūtra Braarvig, J. ed. Solum Forlag, Oslo, 1993.
- Catuhśataka Āryadeva. Vaidya, P. L. ed. *Études sur Āryadeva et son Catuhśataka*, Paul Geuthner, 1923; Lang, Karen. ed. *Āryadeva's Catuhśataka: on the bodhisattva's cultivation of merit and knowledge*, Indiske Studier VII, Akademisk Forlag, 1986.
- Lañkāvatāra-sūtra 南条文雄 ed. 『梵文入楞伽經』 Bibliotheca Otaniensis vol. 1, 1923.
- MMK Nāgārjuna. *Mūlamadhyamaka-kārikā*, de Jong, J. W. ed. *Mūlamadhyamakakārikāḥ* Adyar Library series 109, 1977.
- PP Bhāviveka. *Prajñāpradīpa*. D 3853, P 5253.
- PPT Avalokitavrata. *Prajñāpradīpa-ṭīkā*. D 3859, P 5259.
- Pramāṇavārttika(-svavṛtti) Dharmakīrti. Gnoli, R. ed. *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti: the first chapter with the autocommentary* (text and critical notes), Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 1960.
- Pras Candrakīrti. *Prasannapadā*. Louis de la Vallée Poussin ed. *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica 4, St. Pétersbourg 1903-1913.
- Samādhirāja-sūtra Vaidya, P. L. ed. *Samādhirāja-sūtram*, Buddhist Sanskrit Texts 2, The Mithila Institute, Darbhanga, 1961.
- Tattvasaṃgraha-pañjikā Kamalaśīla. Shastri, S. D. ed. *Tattvasaṃgrahaḥ*, Bauddha Bharati series 1, 2, 1968.

参考文献

- 赤羽律・早島慧・西山亮 2011 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第 XXIV 章 テキストと和訳 (1)」『インド学チベット学研究』15, pp.165-195.
- 上田昇 2008 「論理と体験」『宗教／超越の哲学』岩波講座哲学 13.
- 江島恵教 1982 「自立論証派: パーヴァヴィヴェカの空思想表現」『中観思想』講座大乘仏教 7, pp.147-174, 春秋社.
- 加納和雄・中村法道 2009 「チョムデンリクレル著『弥勒法の歴史』: テキストと和訳」*Acta Tibetica et Buddhica* 2, pp.117-139.
- 斎藤明 2000 「パヴィアの規定する madhyamaka とその解釈をめぐって」『アビダルマ仏教とインド思想』pp.267-279.
- 斎藤明 2003 「『無畏論』の著者と成立をめぐる諸問題」『印度学仏教学研究』51-2, pp.164-170.
- 根部建 1969 『俱舍論の研究: 界・根品』法蔵館.
- 丹治昭義 1988 「中論釈: 明らかなことば」関西大学東西学術研究所.
- 西山亮 2010 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第一章和訳 (1)」『龍谷大学佛教学研究室年報』15, pp.54-69.
- 能仁正顕 1992 「『知恵のとしび』第1章の和訳 (1): 縁の考察」『仏教と福祉の研究』永田文昌堂, pp.45-66.

- 船山徹 2003 「龍樹、無著、世親の到達した階位に関する諸伝承」『東方学』105, pp.134-121.
- 古坂絃一 2001 「『般若灯論広註』に見る『灯論』著作の動機と意義」『密教文化』207, pp.1-22.
- 安間剛志 2008 「Bhāviveka と *Tarkajvālā*」『日本西蔵学会々報』54, pp.47-62.
- 山口益 1944 「中観佛教論攷」山喜房佛書林.
- 若原雄昭 1988 「マントラの効果と全知者: Pramāṇavārttikasavavṛtti 研究 (1) (vv.292-311)」『佛教史学研究』31-1, pp.1-30.
- 渡辺章悟 1996 「プラジュニヤー (prajñā) 再考」『東洋大学文学部紀要』49, pp.76-90.
- 渡辺章悟 1997 「般若波羅蜜多 (prajñāpāramitā) の解釈」50, 『東洋大学文学部紀要』pp.59-79.
- 渡辺章悟 1998 「Prajñāpāramitā の四つの語源解釈」『印度学仏教学研究』46-2, pp.130-137.
- Ames, William M. 1993 "BHĀVAVIVEKA'S PRAJÑĀPRDĪPA, A Translation of Chapter One : 'EXAMINATION OF CAUSAL CONDITIONS' (PRATYAYA)" *Journal of Indian Philosophy* 21, pp.209-259.
- Geshe Ngawang Samten and Garfield, Jay L. 2006 *Ocean of Reasoning*, Oxford University Press.
- Kajiyama, Yuichi 1963 "Bhāvaviveka's Prajñāpradīpaḥ (1. Kapitel)" *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 7, pp.37-62.
- Lee, Jong Cheol 2001 *The Tibetan text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu* (critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions), Bibliotheca Indologica et Buddhologica 8, the Sankibo press.
- Mimaki, Katsumi 1987 "Āryadeva", *The Encyclopedia of religion* vol.1, Mircea Eliade et al., New York, 431a-432a.
- Mimaki, Katsumi 2000 '*Jñānasārasamuccaya* kk°20-28' *Wisdom, compassion, and the search for understanding*, edited by Jonathan A. Silk, 233-244.
- Suzuki, Takayasu 1999 "Mutual Influence among the Mahāyāna Sūtras concerning Sarvalokapriyadarśana" *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 47-2, pp.10-14.

< キーワード > *Prajñāpradīpa-ṭīkā*, Avalokita-vrata, Bhāviveka, 中論, 般若灯論, 観因縁品

(博士後期課程)